

ヘミングウェイの省形容詞の文体 — 『キリマンジャロの雪』における形容詞の使用

Writing Style of Hemingway's Omitting-adjectives
— Use of adjectives in "The Snows of Kilimanjaro"

胸組 虎胤

Toratane Munegumi

ヘミングウェイは形容詞をできるだけ省略した平易で単純な文を書くことで知られている。この「省形容詞」の文体は、修飾辞による曖昧さを極力なくすことによって、鋭い描写をすることに成功している。

本研究においては、まず、ヘミングウェイの「省形容詞」の文体がどのように出来上がったかを彼の履歴から探り、次に、彼の短篇である『キリマンジャロの雪』を例に、「省形容詞」の文体の具体例を見る。この点は客観性のある文体が要求される科学技術論文にも取り入れることが可能である。

0. はじめに

ヘミングウェイについての人物論、評論、文学論については様々に論じられてきたが、その中で最も優れた、そして、網羅的な文学論はCarlos Baker著のErnest Hemingway, A Life Storyであろう。これはヘミングウェイの生涯についての記述、そして、その文学的な経歴についてはこれほどの文献は見当たらない。また、最近出版されたデービッド・サンディソン著の『並みはずれた生涯 アーネスト・ヘミングウェイ』は多くの写真を使いながら彼の生涯に起こった出来事を詳細に記述し、分析しながら紹介している。ただ、これは文学論ではありながら、写真集と伝記の側面も合わせ持つということが出来る。

また、日本語の単行本では、高村勝治著の『ヘミングウェイ』は実際にヘミングウェイが書いた英語の文が掲載され、それをもとにして、ヘミン

グウェイの人物論と文学論を展開している。文例が豊富な点では先に示したCarlos BakerのErnest Hemingway, A Life Storyと同様に参考になる。その他、門司勝の『ヘミングウェイ物語』では彼の年譜が充実している。それと日下洋右（編著）の『ヘミングウェイの時代 短篇小説を読む』ではヘミングウェイの短篇毎に比較的詳しい文学論が展開されている。

ここで、ヘミングウェイの文体についてその起源と形成の過程についてはErnest Hemingway, A Life Storyと門司の『ヘミングウェイ物語』に詳しい記述がある。ところが、『キリマンジャロの雪』などの1つの短編小説を題材にして形容詞の使用と文学的意味について詳しく論じられている評論はあまり見当たらなかった。その点、本研究の課題として文学的側面とともに、その文体の基礎となっている短い簡潔な言い回しの中身（形容詞を省くこと）について、発表するには意味が

ある。さらに、この点は客観性のある文体が要求される科学技術論文にも取り入れることが可能である。

以上の出発点から、本論文を以下の章構成で展開することにした。まず、第1章ではヘミングウェイの「省形容詞」の文体について、彼の生い立ちから文学者としての経歴を見ながら、しかも彼が書いた文の具体例を引きながら論じる。第2章では形容詞の分類を行い、第3章では『キリマンジャロの雪』における形容詞について例を挙げて論じる。第4章では父の死からキューバ、アフリカ、スペインへと至る彼の精神遍歴と文体への影響について探り、『キリマンジャロの雪』の位置付けについて別な角度から見る。そして、第5章として『キリマンジャロの雪』における再生、復活について論じ、結論をまとめる。

1. ヘミングウェイの「省形容詞」の文体

ヘミングウェイの最初の文学活動はハイスクールで始まった。学校内の週間雑誌（『空中ブランコ』（*Trapeze*））の編集者になり、1916年（16才）から1917年（17才）までに30回以上名前が見られる（寄稿していた）。また、季刊の『タブュラ』（*Tabula*）に寄稿していた。これに彼が寄稿した短編小説『セピ・ジンガン』（*Sepi Jingga*）では、

すでにヘミングウェイ的なものを示していた。北ミシガン舞台にして、会話の多い、短い物語のなかに二回も殺人が行われる、いわゆるヴァイオレンス(暴力)の短編であった。¹⁾

との評価もあるが、

中古のタイプライターで叩き出して、そのまま推敲もせずに顧問のジョン・ゲールマンに提出したもので、おおかたは間延びした、つまらぬものとなっている。²⁾

との指摘もある。したがって、このころの彼の文章は題材の取り方において後のヘミングウェイ的なものを示していたが、その文章の構成においてはまだ洗練されていたとはいえない。

しかし、彼は高校卒業後、キャンザスシティ・スター誌の記者となつてからは本格的に文章の修

行をすることができた。

新聞の仕事は畢竟、いかにして「叙述的な文章を書く」か、いかにして「陳腐な形容詞句をさける」か、またいかにして「話を面白く物語るか」を学ぶことに尽きた。³⁾

また、この会社の若い記者が研究すべき文章心得には以下のようにある。

"The key to fine reporting was to use short sentences. Use short first paragraphs. Use vigorous English, not forgetting to strive for smoothness. By positive, not negative."⁴⁾

さらに、

形容詞の使用をさけよ、特に「すばらしい」(splendid)、「華麗な」(gorgeous)、「雄大」(grand)、「壮麗な」(magnificent)など極端な形容詞をさけよ。⁵⁾

この文章心得、会社の文芸部、彼の先輩の例、そして、ピート・ウェリントンの絶え間ない監督がヘミングウェイにジャーナリズムの最初の実地教育を与えてくれた。カンザスシティ・スターでのこのような訓練はわずか7ヶ月であったが、ヘミングウェイの文体の特徴を形づくる基礎になった。後に彼自身

「これらは私が書く仕事について学んだ最良の法則だった。」⁶⁾

と語っている。

次に、彼は第一次世界大戦のイタリア戦線に従軍した後、1919年にカナダのトロントの週刊誌『スター・ウィークリー』（*Star Weekly*）の記者となり、さらに文学的な修行を積んだ。この年にアンダーソン(Sherwood Anderson)のWinesburg, Ohioが出版され、アメリカの小説に"modernism"をもたらしていた。1920年にシカゴに移り住んだヘミングウェイも下宿の住人に文学的な雰囲気があったことなどから、アンダーソンにも実際会い⁶⁾、大きな影響を受けた。アンダーソンの"modernism"の手法は通常の話し言葉の英語のような、より単純な書き言葉を使い、内容よりもむしろ物語の形をより強調し、過去、現在、未来あるいはその混ざった時間と言う、特殊な時間を使っている。多くの若い作家がアンダーソンの"modernist" ideasの影響を受け、ヘミングウェイ

の文体に明らかに彼の影響が見られる。⁷⁾

さらに、1921年に結婚後、ヘミングウェイはトロントの『スター』の特派員としてヨーロッパに渡ったとき、アンダーソンの紹介状を持って、パリの女性作家ガートルード・スタイン (Gertrude Stein) に会った (1922年3月)。ヘミングウェイはこのスタインの指導を受け、くり返しの手法を学んでいる。スタインの文に次のようなものがある。

Rose is a rose is a rose is a rose.⁸⁾

これは映画のひとコマひとコマをつなげたような表現であり、これによって動作が感じられる構成となっている。この影響はヘミングウェイの初期の短篇である『エリオット夫妻』 (Mr. and Mrs. Elliot) の中の次のような文章に見られる。

Mr. and Mrs. Elliot tried very hard to have a baby. They tried as often as Mrs. Elliot could stand it. They tried in Boston after they were married and they tried coming over on the boat. They did not try very often on the boat because Mrs. Elliot was quite sick.⁹⁾

そして、ヘミングウェイは彼女から次のような指導を受けた。

Begin over again-concentrate(condense).¹⁰⁾

それによって、彼の文学の形式の目的は最小限のものから最大限のものを得ることになった。また、ヘミングウェイはパリでエズラ・パウンド (Ezra Pound) から指導を受けた。

パウンドは彼の短篇を読み、青鉛筆で大部分の形容詞を削りとった。¹¹⁾

とあるように形容詞を省くことを改めて学んだ。

ヘミングウェイは、また、パリにいた初めのころに、エズラ・パウンドから力添えをえたことを進んで認め、詩人と面と向かって「この世のどの野郎よりたくさん、どう書け、どう書くなと教えてくれた」と述べています。このときの教えには、形容詞を信用してはいけないという非難も混じっていましたが、¹²⁾

との指摘もある。

以上のように、ヘミングウェイはキャンザシティ・スター誌の記者時代に始まり、トロントの『スター』の特派員、パリにおけるガートルー

ド・スタイン、エズラ・パウンドらの指導によって、形容詞を省き、単純で、意味の凝縮した文章の形式が完成されることとなった。

2. 形容詞の分類^{13, 14)}

2-1 広義の形容詞の種類¹³⁾

『キリマンジャロの雪』における形容詞について論じる前に、形容詞そのものの定義と分類について触れておく必要がある。形容詞は性質形容詞と数量形容詞に分けることができる。前者は「事物の性質・状態・形状など」を表す。また、後者は「数・量・程度」を表す。また、代名詞、冠詞、現在分詞、過去分詞、名詞、前置詞の導く句、形容詞節などは形容詞相当語句として扱われる。

2-1-1 性質形容詞

性質形容詞として分類される語には、たとえば次のようなものがある。

black, good, honest, long, square, wrong, yellow

これらの語は事物の性質・状態・形状などを表す。これらの中には明解な意味を表すものと、他の事物との相対的比較の上で理解されるあいまいなものがある。

2-1-2 数量形容詞

数量形容詞として分類される語には次のようなものがある。

enough, few, first, little, many, much, one, second, several, two

これらの語についても数値、順番等を示す明解な形容詞もあれば、数の値に幅がある比較的曖昧なものがある。

2-2 形容詞の用法による分類¹³⁾

形容詞の用法は限定用法と叙述用法に分類される。前者は「名詞の前後につけて直接名詞を修飾・限定する。」ものであり、後者は「補語として間接的に名詞を修飾・限定する。」ものである。また、これら以外に形容詞が使用されて名詞句が形成される場合、および、動詞句が形成される場合がある。

2-2-1 限定用法

限定用法では形容詞は名詞の前後にあって、直接名詞を修飾・限定する。たとえば、次のような斜体で示される語がある。これらの形容詞は太字部分を修飾している。

(1) 名詞の前からの修飾には次のような例がある。

- i. a pretty girl
- ii. I can see a tall tree over there.
- iii. A big old American woman was standing at the door.

これらの例のうち、形容詞が並んで複数用いられる場合には次のような順序になる。(A) 指示的な a, the, this, that (B) 数量的な few, many, little, much, first, two, three (C) 性質・状态的な calm, diligent, honest, lazy

(2) 名詞の後ろからの修飾の例を示す。

下記の2例では形容詞が他の品詞の語句と一緒に斜体下線部を修飾している。

- i. We heard a sound strange to the ears.
- ii. This is an animal native to Australia.

下記の2例では -thing で終わる代名詞を形容詞が修飾している。

- iii. There is something funny about her.
- iv. I have nothing particular to say.

下記の2例では -able で終わる形容詞が名詞を修飾しており、この場合には名詞に all, any, every, そして最上級の形容詞が付いている場合が多い。

- v. He tried all means possible.
- vi. This is the best plan imaginable.

下記の2例では場所や時を示す副詞が形容詞となっている。

- vii. Japan now is in severe depression.
- viii. The house there is my uncle's.

下記の例では付帯状況を示す場合である。

- ix. He was sleeping with his eye open.

下記の例は慣用表現である。

- x. Japan proper
- xi. On Saturday nest
- xii. On Friday last
- xiii. The people present

2-2-2 叙述用法

主格補語かあるいは目的格補語となる場合を叙述用法と言う。

(1) 主格補語

主格補語となる例を以下に示す。

John is intelligent.

She became rich.

It is getting late.

上記の場合には形容詞(斜形下線)が主語(主格、太字)の補語として働いている。

(2) 目的格補語

目的格補語となる例を以下に示す。

Mary believes him honest.

He found the people very kind.

上記の場合には形容詞(斜形下線)が目的語(目的格、太字)の補語として働いている。

2-2-3 名詞句が形成される場合

「the + 形容詞」の形で普通名詞や抽象名詞になることがある。

(1) 普通名詞になる場合

The young should respect the old.

上記で The young は Young people (若い人々: 名詞) を、

The old は old people (老人: 名詞) を意味している。

The rich are often more close-fisted the poor.

上記で The rich は Rich people (金持ち: 名詞) を、

The poor は poor people (貧乏人: 名詞) を意味している。

(2) 抽象名詞になる場合

He has an eye for the beautiful.

上記で the beautiful は (美: 名詞) を意味している。

She is always demanding the impossible.

上記で the impossible は (不可能: 名詞) を意味している。

2-2-4 動詞句が形成される場合

「be + 形容詞 + 前置詞」で全体として動詞句となる場合がある。

She is afraid of the dog.

He is fond of fishing.

He is sure of her innocence.

She is content with her position.

We are anxious for peace.

I was angry about her carelessness.

上記で斜体下線部は太字部分を含む動詞句を形成している。

2-3 形容詞の感覚による分類¹⁴⁾

上記二つの分類以外にも形容詞を分類する仕方がある。最近出版された形容詞の感覚についての著作¹⁴⁾は、形容詞をまず主要身体的感覚（視覚、聴覚、臭覚、味覚、触覚）とフィールド（知性のフィールド、印象のフィールド、対人関係のフィールド、判断のフィールド）に分類している。

(1) 主要身体的感覚による分類

以下に感覚毎のような形容詞が含まれる。

i. 視覚

・明るい (light, bright, brilliant) 。・暗い (dark, dull, dim) 。・大きい (large, big, great) 。・小さい (small, little, tiny) 。・高い (tall, high, towering) 。・低い (short, low, squat) 。・広い (wide, broad) 。・狭い (narrow, cramped) 。・細い (thin, slim, slender) 。・厚い (thick, chunky) 。・太い (fat) 。・近い (near, close, local) 。・遠い (far, distant, remote) 。

ii. 聴覚

・音が大きい (loud, noisy, rowdy) 。
・音が小さい (silent, quiet, noiseless)

iii. 臭覚

・いやなにおい (smelly, stinking, musty) 。
・いいにおい (aromatic, fragrant, fresh) 。

iv. 味覚

・おいしい (tasty, delicious, succulent) 。
・まずい (tasteless, insipid, unpalatable) 。

v. 触覚

・柔らかい (soft, tender, elastic) 。
・かたい (hard, firm, tough) 。
・かるい (light, lightweight) 。
・おもい (heavy, hefty, cumbersome) 。
・なめらかなてざわり (smooth, sleek, slick) 。
・あらいてざわり (rough, coarse, jagged) 。
・あつい (hot, warm, balmy) 。
・さむい (cold, cool, chilly) 。

・かわいた (dry, parched, arid)

・しめった (wet, soaked, sodden)

(2) フィールド

以下のフィールド毎に次のような形容詞が含まれる。

i. 知性のフィールド

・賢 (intelligent, bright, brilliant) 。
・愚 (stupid, dull, dim) 。
・理解+ (clear, lucid, evident) 。
・理解- (dark, obscure, vague) 。
・興味+ (interesting, absorbing, riveting) 。
・興味- (boring, bland, insipid) 。

ii. 印象のフィールド

・美 (beautiful, lovely, handsome) 。
・醜 (ugly, plain, unattractive) 。
・洗練 (smooth, suave, refined) 。
・野卑 (rough, crude, coarse) 。
・外向的印象 (ostentatious, flamboyant, dramatic) 。
・内向的印象 (modest, reserved, shy) 。
・単純 (simple, basic, fundamental) 。
・複雑 (complex, convoluted) 。

iii. 対人関係のフィールド

・コミュニケーション+ (talkative, articulate, fluent) 。
・コミュニケーション- (silent, quiet, reticent) 。
・寛容 (tolerant, soft, lenient) 。
・厳 (hard, tough, strict) 。
・「口」撃 (acidic, pungent, acrimonious) 。
・丁寧 (polite, courteous, civil) 。
・失礼 (impolite, cheeky, impudent) 。

iv. 判断のフィールド

・同 (same, identical, indistinguishable) 。
・異 (different, unique, distinct) 。
・安全 (safe, harmless, secure) 。
・危険 (dangerous, risky, hazardous) 。
・難 (different, hard, tough) 。
・易 (easy, smooth, simple) 。
・新 (new, novel, innovative) 。
・古 (old, used, antique) 。
・重要 (important, major, vital) 。
・些細 (unimportant, minor, worthless) 。
・善 (good, nice, decent) 。
・悪 (bad, immoral, wicked) 。

以上のように形容詞を感覚によって分類したと

き、身体感覚に関係する形容詞とフィールドに関係する形容詞を比較すると、前者は実体的な現象を示し、いわば絶対的な数量化によってその強さを比較できる。つまり、やや客観性を内在する形容詞と言える。しかし、後者は抽象的であり、場面毎での相対的比較か、あるいはそれを判断する人間の主観が大きく影響する。つまり、やや主観性を内在する形容詞と言える。

このような感覚による形容詞の分類法の利点はいくつか考えられる。文学においては、これらに分類されるどの形容詞を多用しているかによって、その作者の意図を類推することができるのではないだろうか。次に、ヘミングウェイの短編の1つであり、彼の人生の中で最も波乱に満ちた時代に書かれた『キリマンジャロの雪』における形容詞について検討する。

3. 『キリマンジャロの雪』における形容詞

3-1 ヘミングウェイの作品での形容詞の意義

ヘミングウェイの文章は単純で分かりやすく、形容詞をなるべく使用しないことで知られていることはすでに第1章で述べた。それについての以下のような記述がアメリカ文学の著名な解説書に見られることに注目したい。

Hemingway's sentences are usually short and simple. Only rarely does he use adjectives. He will sometimes repeat a key phrase (e.g. You're an expatriate to emphasize. The language is rarely emotional. Rather, it controls emotions: it holds them in. The aim of this language is to suggest a kind of stoicism. This same stoicism is often the main theme in Hemingway's stories.¹⁵⁾

ここで、「ヘミングウェイの文は通常短く単純であり、彼は本の稀にしか形容詞を使わない。」とある。しかし、「同じフレーズをくり返す。」とある。これは彼が曖昧な形容詞で表現内容をぼかすのではなく、はっきりとした動作や会話を記述して、めりはりの効いた短い単純な文章で表現していることを意味する。同じひとつの文の中にも彼の文には内容が凝縮している。一方、このよ

うに形容詞を使わない代わりに、同じフレーズをくり返して強調する手法も使っている。また、つぎのようにある。

Hemingway perfected his writing method by experimenting with the short story. His early short story collections, in our time (1924) and Men Without Women (1927), carefully mix psychological realism with symbolism.¹⁶⁾

ヘミングウェイは短い物語を使って、彼の文体を実験していた。そして、そこにあらわれているのはリアリズムと象徴主義であった。あいまいな形容詞を使わないことはリアリズム的であり、同じフレーズをくり返し使うことは象徴主義的であった。

3-2 『キリマンジャロの雪』における形容詞の数と種類

『キリマンジャロの雪』における形容詞はのべ合計234語であり、そのうち175語は限定用法として用いられ、59語が叙述用法として用いられている。この作品の語数は約11000語であるから、形容詞は全体の2.1パーセントである。この調査結果だけでは、形容詞の数が多いか少ないかを判断できない。そこで、他のアメリカ人作家の小説と比較した。

たとえば、ナタニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) の The House of the Seven Gables (1851) ではのべ2360語が形容詞であった。この小説は約44000語で書かれているので、約5.4パーセントが形容詞である計算になる。したがって、The House of the Seven Gables (1851)との比較では、ヘミングウェイの『キリマンジャロの雪』の方が形容詞が少ないということになる。この小説は『キリマンジャロの雪』より80年ほど前に書かれたものであるが、アメリカの作家が書いたものである点では共通している。ただし、この結論は多くの小説との比較を試みることで信頼性が増すと考えられる。

3-3 『キリマンジャロの雪』における特徴的な形容詞

この小説で使われている形容詞の特徴をいくつか

次にまとめる。

(1) 長い形容詞を使わない。

まず、3音節以上の形容詞が全体の使用回数の10パーセント以下しか使われていない。使われている3音節以上の形容詞には以下20語である。Marvelous, comfortable, necessary, amusing, successful, regular, appreciative, overdue, different, melodramatic, sprawling, plastered, silvered, repetitious, romantic, humorous, glamorous, contemptuous, fantastic, difficult

これらの形容詞は比較的意味が明解で、直接的であり、抽象性が高いものは少ない。このことはこの小説の文の短さ、単純さ、明確さという印象につながっていると思われる。

(2) いくつかの単語をハイフンでつないで形容詞として用いる

本文にあらわれるハイフンで結んだ形容詞を以下に示す。

Quick-moving, middle-aged, evil-smelling, rose-petal, smooth-bellied, god-damned, well-known, well-loved, small-of-back-caressing, horse-hair-plumed, cooperative, big-headed, gray-yellow, green-rising

これら14語が本文で使われているが全体の約6パーセントである。これらの語は形容詞を節約できるとともに、一つの形容詞の意味を、いくつかの明解な副詞と形容詞を組み合わせることによって明確にすることができる。曖昧さを極力減らす効果があると考えられる。

(3) 色に関する形容詞が使われている

次のような色に関する形容詞が使われている。black, white, yellow, red, gray, gray-yellow, purple, brown, pink

色に関する形容詞はその意味する所が限定されていて、比較的明確で、客観性がある。しかも、印象を深めさせる効果が大きいと考えられる。たとえば、主人公が死ぬ直前に見た夢の中の光景では次のようにある。

"and the plain as far as you could see, gray-yellow now and ahead old Compie's tweed back and the brown felt hat."¹⁶⁾

"and then they were over mountain with sudden depths of green-rising forest and the solid bamboo slopes"¹⁶⁾

"purple brown, bumpy with heat and Compie looking back to see how he was riding."¹⁴⁾

"he saw a pink sifting cloud"¹⁶⁾

"all he could see, as wide as all the world, great, high, and unbelievably white in the sun, was the square top of Kilimanjaro. And then he knew that there was where he was going."¹⁴⁾

飛行機が飛んでいき、機内から見える光景を鮮やかな色 gray-yellow, brown, green-rising, purple brown, pink, などで表現している。その後、飛行機が嵐の中に入り、そこを抜けた。そのとき飛行機が指差す方向を見ると真白な陽光に輝くキリマンジャロ頂上が見えた。

このキリマンジャロの頂上の白さは、そこまで描写してきた鮮やかな色と対照的な新鮮さをもたらしている。しかも、この 'white' はこの小説全体に何度も登場しており、小説の中で一つの基調でありテーマを表現している重要な色である。

『キリマンジャロの雪』の中で表現されている 'white' にはどのような意味があるのだろうか。

その答えは

" And then he knew that there was where he was going."

の中にある。

この 'white' は彼が進んでいくところであり、彼が進むべき理想の地であったと考えられる。つまり、'white' はその象徴である。この 'white' は主人公ハリーにとっての理想の地であるとともに、作者のヘミングウェイ自身にとっても進むべき理想の地である。

「この真白 (white) な山頂は死の象徴とすることもできようが、-(中略)-ヘミングウェイにあっては山や雪は理想とか幸福とかの象徴である。」¹⁷⁾

とある。

また、『キリマンジャロの雪』はヘミングウェイの自己投影的な作品である。¹⁸⁾

3-4 『キリマンジャロの雪』における形容詞の感覚

(1) bigの使用

‘big’は「感情の乗る、豊かな広がりのある単語」であり、この語が使われると、強い印象を与えることができる。この小説では‘big’が何回か使われている。

‘big birds’, ‘big trees’, ‘big square porcelain’, ‘big iron soap kettles’ 等である。これはこの語と対極の意味をもつsmallに比べてはるかに多い。このことによって、修飾される語を強調することができる。

(2) badとgoodの使用

この小説では‘bad’と‘good’が比較的多く使われている。

‘bad marc’, ‘bad for you’, “good destruction”, ‘good water’, ‘good to you’などである。

これらの語は互いに意味が対極になる語であり、しかも、単純な意味をもつ明解な語である。形容詞の意味、使われ方、回数等についてはさらに詳しい調査を行えば、明らかになることは十分にありと考えられるが、この論文では考察はこの程度としたい。この論文の目的は形容詞の統計的处理よりも、むしろヘミングウェイがこの小説で述べたかったことと、形容詞を省くことによってそれをどのように表現したかを見ることであるからである。では、次に、ヘミングウェイが『キリマンジャロの雪』を書くまでの彼の身辺と心情の変化から見ていきたい。

4. 父の死からキューバ、アフリカ、スペイン

ヘミングウェイが『キリマンジャロの雪』を出版したのは1936年であり、このときヘミングウェイには『武器よさらば』（1929年出版）以来よく売れる小説を出版していなかった。この期間にあった出来事は『キリマンジャロの雪』に表現されている内容をさらに深く理解することにつながるのではないだろうか。

4-1 父の死

ヘミングウェイが『武器よさらば』（1929年出版）の執筆を始めたのは1928年3月のことであった。この長編小説の初校は8月末に書き上げられた。10月の最後の週にヘミングウェイは家

族を伴って、生まれ故郷のオーク・パークの住む両親を訪問している。これがヘミングウェイが父と会った最後であった。12月6日父が銃で自殺したのである。このことはヘミングウェイにとって大きな痛手となった。

「今度のことで一番参ったのは、父こそ本当に心にかけていた人間だったことだ。」¹⁹⁾と彼は言っている。また、彼はこのことによって、父の負債をかかえ、母、弟、妹、自分の妻子に頼られる身となった。幸いなことに『武器よさらば』が出版されることになっており、収入を見込むことができた。

しかし、さらに彼に不幸が襲った。1930年11月モンタナ州でドス・パソスと同乗した自動車が事故を起こし、商売道具の右手を複雑骨折してしまった。1931年春まで彼はほとんどものを書くことがなかった。

4-2 スペイン、キューバ、アフリカ

1931年の夏に彼は、闘牛についての本を書くための資料を集めるためにスペインに旅行した。この取材を基礎にして1932年9月に『午後の死』を出版することができた。1932年と1933年の4月にヘミングウェイはキューバに旅行した。このとき、キューバの革命が起り独裁政権であるマチャード政権が倒れた。

この年の11月にヘミングウェイは妻とアフリカへ猛獣狩りに行った。この時の経験をもとに、彼は『アフリカの緑の丘』を書いた。彼はアメーバ赤痢を煩ったが、回復後狩猟旅行を続けた。

以上のように、1929年以降、父の死を経験し、交通事故で右手を負傷して一時ものを書けなくなり、スペインでは牛と闘牛士の死と生について考えさせられ、さらにはアフリカでの狩猟で動物の死、自らの闘病を経験した。これらの経験は、新しい小説である『キリマンジャロの雪』に描かれているリアリティーに直結することとなったのではないだろうか。

一方、この時期、二種類の死の幻影がヘミングウェイを脅かしたという説もある。²⁰⁾一つはヘミングウェイの肉体に襲いかかった上記の事故、父の死、アメーバ赤痢であり、もう一つはヘミングウェイの作家活動と作家的信条に押し寄せたも

のであるという説である。

「闘牛場に遊びアフリカに逃れてアメリカの
現実から目をそらしている」²⁰⁾

という不本意な批評が浴びせられたことである。

これらのことは『キリマンジャロの雪』という
作品に大きく影響している。

5. 『キリマンジャロの雪』における再生、復活

ヘミングウェイの小説は虚無を扱っていると言
われる。『キリマンジャロの雪』の設定、つまり、
とげがささって、その傷にヨードを塗らなかった
ために、壊疽になって死んでいく主人公の作家の
無力と空しさを描いているようにも見える。しか
し、この小説はそれだけでは終わらない何かを提
示しているような気がする。

主人公のハリーは傷付き苦しむ中で、自分の人
生で起こった様々なことを回想していく。それは
単なる思い出だけではない。ハリーの回想の中に
登場する文学的スケッチは無駄がなく、リアルで
ある。これらは病にあるハリーの意識が朦朧とし
ている中にあって、益々シャープに浮かび上がっ
てくる箇所である。ハリーは生死の境の中でぎり
ぎりの力を振りしぼって、文章を紡ぎ出している
かのである。ハリーは決して目指す目標に達
せず倒れたのではなく、苦しんで前に進んでいる
中にすでに精神的には目標に達しているのではな
いだろうか。

このハリーの状態は作家ヘミングウェイ自身の
挑戦の姿であり、彼は決して敗れてはいないので
ある。死の床にあって前にも進もうとしている姿
はすでに勝っている姿なのである。死の床にあっ
ても夢を見られるということは目標に到達してい
ることを意味するのである。この点は、ヘミング
ウェイが後に書く『老人と海』の主人公であるサ
ンチャゴが負けてもライオンの夢を見ることがで
きた姿と酷似しているように見える。

6. 結 論

以上の論文の結論は以下のようにまとめることが
できる。

(1) ヘミングウェイの形容詞を使わない文体は

高等学校時代よりもカンサス・スター社以降での
修行によって培われた。

(2) ヘミングウェイの形容詞を使わない文体は
アンダーソン、エズラ・パウンド、スタインらの
交流によって、発展させられた。

(3) キリマンジャロの雪における形容詞の使用
は使用単語全体の約2.1パーセントである。こ
れはホーソーンの小説の40%程度でしかない。

(4) ヘミングウェイはwhite, big, bad, goodな
どの単純な形容詞を使うのみで、3音節以上の形
容詞の使用はきわめて少ない。

(5) 上記の単純な形容詞の繰り返し使用によっ
て、印象を強めることに成功している。

(6) 特に、whiteは重要な形容詞であり、この
作品の主題を象徴している。

(7) ヘミングウェイはこの小説によって夢はあ
ってもそれをかなえられずに死んでいく小説家の
虚無を表現しているという解釈とは逆に、夢を見
ているだけでその苦しみにすでに勝利していると
見ることもできる。

注

1. 高村勝治『ヘミングウェイ』（研究社、1986）
p.3.
2. カロス・ベイカー著、大橋健三郎、寺門康彦
監訳『アーネスト・ヘミングウェイ（上）』
（新潮社、1980）、p.50.
3. カロス・ベイカー著、大橋健三郎、寺門康彦
監訳『アーネスト・ヘミングウェイ（上）』
（新潮社、1980）、p.58.
4. C. Baker, Ernest Hemingway A Life Story,
(Scriber, 1969), p.34.
5. 高村勝治著の『ヘミングウェイ』（研究社、
1986）、p.5.
6. 高村勝治著の『ヘミングウェイ』（研究社、
1986）、p.8.
7. P. B. High, An Outline of American Literature,
(Longman, 1986), p.119.
8. P. B. High, An Outline of American Literature,
(Longman, 1986), p.131.
9. 高村勝治著の『ヘミングウェイ』（研究社、
1986）、p.11.

10. P. B. High, An Outline of American Literature, Longman, p147, 1986.
 11. 高村勝治著の『ヘミングウェイ』、(研究社、1986)、p.9.
 12. デービッド・サンディソン 『並みはずれた生涯 アーネスト・ヘミングウェイ』、(産調出版)、p.59.
 13. Toyonaga, A. (豊永彰) 『英文法 ビフォー&アフター』 東京 : 南雲堂2003年, p270-275.
 14. Mcvay, P.C. and Onishi, T. (大西泰斗) 『形容詞の感覚』 東京: 研究社 2003年,
 15. P. B. High, An Outline of American Literature, (Longman, 1986)、p.147.
 16. P. B. High, An Outline of American Literature, (Longman, 1986)、p.147.
 17. 高村勝治 『ヘミングウェイ』、(研究社、1986)、p.93.
 18. 加藤宗幸 『ヘミングウェイ・ノート -虚無の超克-』、(九州大学出版会、1982)、p.209.
 19. カールロス・ベイカー著、大橋健三郎、寺門康彦監訳 『アーネスト・ヘミングウェイ(上)』、(新潮社、1980)、p.228.
 20. 加藤宗幸著の『ヘミングウェイ・ノート -虚無の超克-』、(九州大学出版会、1982)、p.210.
- York: Scriber, (e-book) Amazon. Com. Digital 2002. High, P.B. An Outline of American Literature, New York: Longman, 1986.
- Kato, M. (加藤宗幸) 『ヘミングウェイ・ノート-虚無の超克-』 福岡: 九州大学出版会 1982年.
- Mcvay, P.C. and Onishi, T. (大西泰斗) 『形容詞の感覚』 東京: 研究社 2003年.
- Mitani, H. (三谷眸) (訳), 『並みはずれた生涯 アーネスト・ヘミングウェイ』, 東京: 産調出版 2000年.
- Moji, M. (門司勝) 『ヘミングウェイ物語』 福岡: 葦書房1982年.
- Ohashi, K.(大橋健司), Terakado, Y. (寺門康彦) (訳) 『アーネスト・ヘミングウェイ』 東京: 新潮社 1980年.
- Toyonaga, A. (豊永彰) 『英文法 ビフォー&アフター』 東京 : 南雲堂2003年.
- Takamura, K. (高村勝治) 『ヘミングウェイ』 東京: 研究社1980年.
- Yasui, M. (安井稔) 訳『現代英文法総論』 東京: 開拓社2003年.

「受理年月日 2005年 9月30日」

使用テキスト

Ernest Hemingway, The Snows of Kilimanjaro, in the First Forty-Nine Stories, London: Arrow Books.1993.

参考文献

Baker, C. Ernest Hemingway A Life Story, New York: Scriber, 1969.

Hemingway, E., The Snows of Kilimanjaro and Other Stories, New York: Scriber, (e-book) Amazon. Com. Digital 2002.

Hemingway, E., Green Hills of Africa, New